



未来に向かって伸びる鶴嶺の子

# 鶴小だより 6月号

茅ヶ崎市立鶴嶺小学校  
校長 日高 大司郎  
令和7年6月9日発行



## 子どもが真ん中・・・

今年度の運動会は、お話しさせていただいたように「子ども主体」の運動会により近づけるよう、徒競走をやめて、団体競技にしたり、今まで「リレー」を実施してきた部分を子どもに任せて、何のために、どのような競技等をするのか、リレーも含めて考えてもらったりしてきました。いかがだったでしょうか。保護者の方の中には、「リレーが見たかったなあ」という思いをもたれた方もいたはず。声として担任にお話しさせていただいた方もいらしたと聞いています。

僕は、そういった保護者の皆さん（特に例年リレーの選手として活躍されていたお子さんの保護者の方々）のお気持ちは十分理解していたつもりです。しかし、はっきり言ってしまえば、大変失礼ながらその気持ちに寄り添うつもりは全くありませんでした。

それは、僕が見ているのは保護者ではなく、子どもたちだからです。僕らが経験したことのない社会を生きなければならない子どもたちに、何を学ばせる必要があるのか、子どもたち1人1人にどのような力をつけなければならないかを自身に問うたとき、「子ども主体」というキーワードが、必然のように浮かび上がりました。学校が、今までやってきたことを踏襲して、同じような教育を続けていては、この変化の速い社会に取り残されてしまいます。

僕は、「運動会」をリデザインしようと考えた時、保護者の皆さんのお気持ちには添えないだろうなと思いつつ、今進めているような形に決めたのです。先ほども言ったように、子どものことを1番に、子どもを真ん中に置いて考えたからです。

さて、それと別ですが衝撃の走る事件がありました。児童間のトラブルを巡って保護者が学校側と話し合いをし、その内容に納得がいかず、終了後しばらくしてから母親が男性2人を連れて来校、無施錠の門から敷地に入り、無施錠の出入り口から校舎内に入って、教職員に暴行したというものです。詳しい内容は分かりません。子ども同士のどんなトラブルだったのか知ることもしません。でも、このお母さんの行動は「おかしい」とお感じになった方は多いのではないかと思います。

では、何が「おかしい」のでしょうか。その部分を共有したいと思います。この発端は、子ども同士のトラブルです。何かをされたり、いじめのような内容があったのかも知れません。ここで、皆さんと確認したいのは、それは誰のトラブル・問

題なのかということです。どうですか?! お分かりになりますよね。そう、「子どもの問題」です。親御さんにしたら、本当に心配だし、やられている側だとしたら、悔しい思いでいっぱいになるでしょう。けれど、それはどこまでいっても、「子どもの問題」であることは揺るぎません。

詳しいことは分からない前提でお話すると、学校とのやりとりの中で事件の保護者は、ご自分の中に沸き起こった怒りの感情を収めることができなくなってしまったようです。もう気づかれた方がいらっしゃると思います。この事件の「おかしさ」は、「子どもの問題」が「自分の問題」にすり替わっているところです。自分の感情を上手に抱えて、自分で処理できないが故に、それを解消するための手段が、事件となってしまいました。

僕らは人間ですから、怒りもするし、悲しんだりもします。当然のことです。けれど、「子どもの問題」でそうになっている自分があると分かったら、落ち着いて、自分が納得するためではなく、子どもを真ん真ん中に置いて、子どものために何をすべきかを考えて欲しいのです。事件の当事者の子どもは、この後どんな気持ちで学校に通うのかを想像してみてください。

運動会の話と事件の話を見てきました。「私は、リレーがどうしても見たかった。」「私は、学校の対応に納得がいかない。」という思いの本来あるべき主語は誰でしょう。そういったお気持ちを抱かれることは、おかしいことでも悪いことでもありません。それは、大人同士互いにきちんと話せばよいことです。けれど、そういった話の前に、「子ども」を主語とした話がなされないとしたら、それは問題の本質を見失っているということになります。学校は、子どもが真ん中の場所ですから。

「みんなの学校」の木村泰子元校長先生は、保護者と呼ばず、サポーターと呼んで学校のすべての子どもたちを支えてもらうというお話をされていました。僕はこの考えに大賛成です。皆様が、サポーターとして、様々な子どもに関わってくださること、ご自分のお子さんにもサポーターの立ち位置を崩さないことは、子どもの人生にとって、必ず良い方向に働くと考えています。

本校の取り組みが、まだまだ十分でないことも承知しています。けれども、サポーターの皆さんと一緒に、この学校の子どもたち1人1人に、いつでも「どうしたい?!」と投げかけられる、子どもたちがしっかり考えた、自己選択自己決定を実現できる、そんな学校を創りたいのです。いつでも「子どもが真ん中」で話しませんか。